第 3 3 回 日 本 が ん 登 録 協 議 会 学 術 集 会

P2-1

島根県院内がん登録解析事業を活用した肝癌背景因子の実態調査

中林 愛恵[1)]，飛田 博史[1)]，内田 靖[2)]，引野 美貴子[2)]，河野 通盛[3)]，名原 陽子[3)]，三宅 達也[4)]，加村 菜月[4)]，古田 晃一朗[5)]，田中 和子[5)]，山口 祐貴[6)]，長戸 緑[6)]，下諸 可奈絵[7)]，川上 あゆみ[1)]，田村 研治[1)]

1）島根大学医学部附属病院，2）松江赤十字病院，3）松江市立病院，4）島根県立中央病院，5）浜田医療センター，6）益田赤十字病院，7）島根県健康福祉部

背 景 と 目 的

- 肝炎の早期発見・早期治療等ウイルス性肝炎への対策が進展する一方、アルコールや糖尿病を背景とする肝癌も注目されてきている。
- 今後の肝癌対策のため、肝癌患者の背景因子を明らかにする。

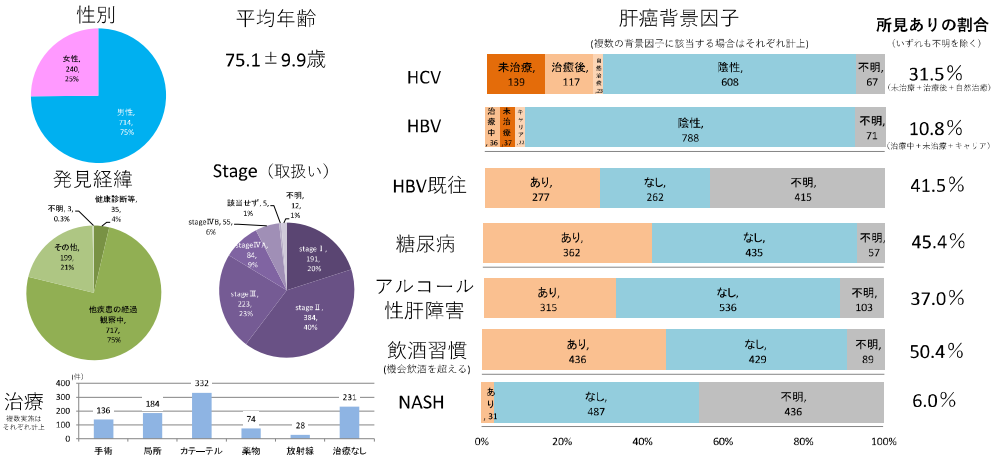
方 法

- 院内がん登録はそれぞれの施設のがんの悉皆性を有するが、合併症等の背景因子の情報はない。がん診療連携拠点病院を中心とした6医療機関で、初めて肝細胞癌と診断された患者を対象とし、背景因子の診療録調査を追加して行った。調査データは匿名化して島根大学で収集・解析を行った。
- 年齢による違いの把握のため、肝細胞癌患者を75歳以上の後期高齢者と非後期高齢者に分けて比較した。

使用データ	各施設の院内がん登録データ（島根大学医学研究倫理委員会承認）
対象年	2016年～2021年がん罹患（6年分）
研究参加病院	島根大学医学部附属病院，松江赤十字病院，松江市立病院， 島根県立中央病院，浜田医療センター，益田赤十字病院
研究組織	上記病院の肝がんを診療する医師と院内がん登録実務者、 島根県肝炎対策担当者
対象部位と症例区分	肝臓（ICD-O-T＝C220、ICD-O-M959-972は除く） 自施設治療実施症例（症例区分20、21および30、31） 954症例
院内がん登録からの解析項目	性別，年齢，発見経緯，stage（原発性肝癌取扱い規約第6版），治療
診療録調査からの解析項目	HCV，HBV，HBV感染既往，糖尿病合併，アルコール性肝障害，飲酒習慣，NASH

結 果 1：調査対象全体の概要と肝癌背景因子

- HCV，HBVウイルス性肝炎よりも糖尿病、アルコール性肝障害、飲酒習慣等の所見ありのほうが多かった。
- HCV，HBVに感染していても肝炎治療済の症例が多かった。
- アルコールやウイルスなどを原因としない脂肪肝NASHは6%に認められた。



結 果 2：年齢による比較

- 75歳未満の方が健康診断等で発見された割合が高かった。
- 75歳以上の方がHCV未治療の割合もHBV未治療の割合もともに多かった。
- 75歳未満の方がアルコール性肝障害や飲酒習慣ありの割合が高かった。
- ステージの割合に違いは認められなかったが、75歳未満は外科・局所治療割合が多く、75歳以上は治療なしが多かった。

	75歳以上（532人）	75歳未満（422人）	*P*値
健康診断等での発見	12	23	0.01
HCV未治療 / HCV治癒後	97 / 60	42 / 57	＜0.01
HBV未治療 / HBVキャリア・HBV治療中	14 / 10	23 / 48	0.04
アルコール性肝障害あり / なし	123 / 339	192 / 197	＜0.01
飲酒習慣あり / なし	199 / 271	237 / 158	＜0.01
Stage Ⅰ / Ⅱ / Ⅲ / Ⅳ	96 / 231 / 123 / 73	95 / 153 / 100 / 66	
Stage Ⅰ vs Ⅱ, Ⅲ, Ⅳ	96 vs 427	95 vs 319	0.10
Stage Ⅰ, Ⅱ, Ⅲ vs Ⅳ	450 vs 73	348 vs 66	0.45
外科 / 局所 vs カテーテル / 薬物 / 放射線	65 / 91 vs 197 / 36 / 13	71 / 93 vs 135 / 38 / 15	0.04
肝癌治療を受けなかった	142	89	＜0.01

考 察

- 肝癌背景因子の実態調査から、肝炎治療を受けなかった割合が高い後期高齢者の早期発見と、アルコール性肝障害患者と糖尿病患者の肝細胞癌の発症予防と早期発見のための対策を講じる必要性が示唆された。

第33回日本がん登録協議会学術集会 当演題発表に関連し、開示すべきCOIはありません。
島根大学医学部医療サービス課がん登録室　中林愛恵
連絡先：tel（0853)20-2587　e-mail canregshimane@office.shimane-u.ac.jp